

昭和30年代の 僕と日本の少年時代 備忘録

千葉豹一郎

あの日、未来は明るかったー。
慌ただしくもほっこりと、
現代人の郷愁を誘う
“昭和30年代のマスカルチャー”

実写版『鉄腕アトム』と『鉄人28号』 Live-action version of Astro Boy & Tetsujin 28

昭和38年(1963)1月1日、火曜日。この日、国産初の本格的長編アニメ(とはまだ呼ばず、マンガとかマンガ映画と言われていたが、区別上ここでは「アニメ」で統一する)『鉄腕アトム』の放送が始まった。僕は家族で出掛けた熱海のホテルで観た。もちろん、偶然観たのではない。原作が連載されていた月刊『少年』などで度々予告され、友人のあいだでも「必ず観よう」と話し合っていた。

僕の一番の興味は、以前放送していた実写版、アトムとどう違うのかだった。アニメ版は主題歌からして実写版とは違い(作詞は谷川俊太郎!)、当然ながらマンガがそのまま動く躍動感にみなぎって、まったくの別物だった。アニメの『鉄腕アトム』はたちまち人気を博し、スポンサーの明治のマーブルチョコレートを買うともらえるアトムシールは、日本中の子どもたちがランドセルや勉強机などに張る必須アイテムとなった。アメリカなど外国の各地でも放送され、日本アニメの実力を世界に知らしめる先駆けともなった。

同じ年の秋には『鉄人28号』のアニメ版も始まって、人気を分け合った。その一方で「鉄人」も「アトム」も実写版の存在は次第に忘れられ、アニメ版の方が半ば無視された『スーパーマン』や『月光仮面』と好対照を成す結果となった。後年には椰や揄ゆの対象にまでなった実写版の「鉄人」と「アトム」とは、一体どんなものだったのだろうか?

*

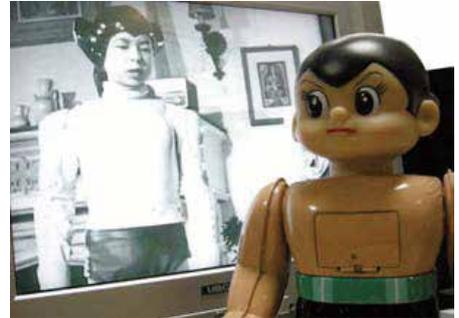
昭和33年(1958)スタートの国産初のヒーロー物『月光仮面』の大成功により、『遊星王子』、吉永小百合も出ていた『まぼろし探偵』、だいぶ後まで縁日でお面が売られていた『七色仮面』、『怪傑ハリマオ』、『ナショナルキッド』、『少年発明王』と次々に実写物が生まれ、一世を風ふう靡びした。

ヒーロー物ではなかったが、『恐怖のミイラ』は同世代の誰もが「今までで一番怖かった」と口をそろえる出来で、回を重ねるごとに怖さが増し、最終回まで観た者はほとんどいなかった。僕も、これらのほぼすべての実写物を熱心に観ていた。どれも特撮とも言えないようなレベルだったが、そのチープさがむしろ日本らしくて好ましく、知っている場所や、年齢が少し上ぐらいの子が出てくることにも親近感を持った。

「アトム」には主役の瀬川雅人が画面から視聴者に語り掛けるシーンがあり、友達視線なのがすごく気に入った。主題歌もノリが良くて覚えやすかった。初回の始めの方だけがアニメで、後は黒いアトムヘルメット、と肉襦袢も着たこの瀬川君が大活躍した。途中からメットが白っぽくなり、肉襦袢もガラリと変わって、モノクロでもかなり濃い色になったのがはっきりわかった。

飛ぶシーンも人形なら、飛行機などと比べると縮尺も相当いい加減だったり、外国人の少女が車を運転したりと、笑えるシーンもよく出てきた。悪人たちが飛ばそうと悪戦苦闘していた円盤は、スバル360に羽根をくっ付けただけ!これじゃ、飛ぶわけないよ。この時子分を演じていた、ジャイアント馬場にそっくりな羅生門という巨漢は、黒澤明の『用心棒』(1961)にも出ていたし、他にも別のドラマで見掛ける俳優がちょこちょこ出演していた。

戦後、東京で初めてプラネタリウムを設置した渋谷の東急文化会館が出てきた時には、思わず身を乗り出した。ここでは、事故で早世した赤木圭一郎の出世作『素っ裸の青春』(1959)や現都知事の石原慎太郎主演の『危険な英雄』(1957)にも登場する。後者では身代金の受け渡し場所に使われ、前の明治通りがまだ未舗装なのに驚いた。ちょうど実写版「アトム」をやっている昭和35年(1960)ごろ、幼稚園でプラネタリウムを見学に行く道中、僕と話しながら歩いていた歌舞伎界の御曹司が明治



通りでひっくり返った時にはもう舗装されていたから、オリンピックの開催も決まって、東京の変貌は日々激しくなっていた。

うちの近くの環七と第二京浜の立体交差のシーンも出てきた。日本初の立体交差だとかでロータリーがすごくモダンに見え、『少年探偵団』のオープニングや『鉄人』(羽田へ行くと言いながら逆の世田谷方面へ走っていた)を始め、多くのドラマに使われた。車で通り掛かると、必ずうちの誰かが「あそこが高橋貞二の家だ」とロータリー脇の高台にある木々に隠れた屋敷を指差した。

「タカハシテイジってだれ?」「知らないのか。有名な映画スターじゃないか」中井貴一の実父、佐田啓二と人気を分け合った松竹のスターである。昭和34年(1959)に酔っ払い運転で事故死し、まだその記憶が生々しかったのだろう。急速に増えつつあった車に人もハードも追いつかず、昭和36年(1961)には赤木、39年(1964)には佐田の両氏も交通事故で急逝する。

しかし、子どもにとってはテレビの俳優こそがスターだ。ましてや、邦画を定期的に観に行く習慣はうちには無かったから、映画スターなんて遠い存在で、三船敏郎と石原裕次郎ぐらいしか知らなかった。雑誌に載っていた瀬川君の家もそこから近い品川区で、余計アトムに親しみを覚えた。友人たちともそんな話で盛り上がり、お誕生会にはアイスクリームのドライアイスを入れたては、ポコポコ出る煙を見て、お茶の水博士の研究室だとはしゃいでいた。

ただ、「アトム」の最終回は見逃してしまった。その日は何かの用で家族の誰かと出掛

けねばならず、僕は気が気でなかった。焦って帰宅した時には、もう終わりに近かった。昔のブラウン管テレビは、真空管が温まって画面が出るまで時間が掛かる。こんな時に何百回イライラさせられたことか。ようやく映った画面では、お茶の水博士が空から舞い落ちてきた羽毛みたいな物をつかんで、「これが〇△の腹わただ」とか言って空を見上げ、アトムが特攻作戦を敢行したらしい事しかわからなかった。最終回を観た誰かに内容を聞いたはずだし、アニメ版「アトム」が始まる前に何度かリピート放送も観ていたはずなのに、まったく記憶が無いのは不思議な話だ。最終回まで観た者が皆無に近い『恐怖のミイラ』じゃあるまいに。

昭和の終わりに、深夜のバラエティ番組で実写版「アトム」が1話だけ放送され、何十年かぶりで再見したが、また別の謎を突き付けられることになった。「監督」とあった志し波ば西せい果かは、戦前の有名な監督・脚本家。年鑑によれば、報道カメラマンとして日中戦争に従軍し行方不明となっている。驚いていろいろ調べてみたものの、わからずじまい。現在では名前だけ借用して本人ではない可能性が指摘されているも、真相は藪やぶの中だ。

＊

同じ番組で実写の「鉄人」も放送され、こちらで戦前から時代劇で名をはせた丸根賛太郎が、何話かの監督と脚本を手がけていたのを知った。なるほど。場違いと思った時代劇っぽい主題歌に合点があった。アトムと同じプロダクションの制作で、名の知れた監督が両者に関わっていたらしいことは注目に値するが、「鉄人」の方は「アトム」にも増してチープでマイナーだった。放送期間も数か月程度と、1年以上続いた「アトム」とは比較にならず、存在自体を知らない人も少なくない。

主人公の金田正太郎少年と大塚署長はマンガとよく似ていたが、肝心の鉄人がいただけない。巨大なはずの鉄人が人間より少し大きいだけ。機動隊もどきのフード付きヘルメットをかぶった、ドラム缶の化け物のような姿は、マンガとはあまりに掛け離れていた。アニメ版のように空を飛ぶどころか、ロボット同士の対決すら無い。「アトム」以上に有名な俳優が出てきたものの、話の展開ものろくて、尻切れトンボのまま終わってしまった……。

当時の技術ではいずれも実写化には無理があり、アニメ版が大成功して、作品があまりにも有名になり過ぎたのが悲劇だった。中学のクラスメイト横山君の父親の名は、光輝！ 交通違反をした際、「鉄人」作者の横山光輝と勝手に間違えた警官が、子どもがファンだと言って許してくれたそうで、それほど誰もが知るまでになっていた。「アトム」も日本のロボット工学を飛躍的に発展させたといわれ、今もアニメの主題歌がJR高田馬場駅の発車チャイムになっている。十数年前からアトムの妹「ウラン」の声を担当していた水垣洋子さんとお知り合いになったが、当時まだ生まれてもいなかった若い世代でも、ウラン役とわかると途端に畏い敬けいの目で見えるようだ。

アトム役の清水マリさんも同様で、アトムの声は彼女じゃないと納得しない人がほとんどだ。僕も、もちろんその一人。昨年お会いした折には、久しぶりにちょっと感動してしまった。清水さんの実父、清水元氏は『マグマ大使』でマグマ大使の生みの親「アース様」も演じた名優。親子2代に渡って手塚作品とは縁が深い。清水さんは多くの中から手塚氏本人が時間を掛けて選



び、「これでアトムに魂が入った」とつぶやいたそう。魂とは言い得て妙で、さすが氏の目に狂いは無かった。

実写版への不満がアニメ化の推進力になったとも言われるが、悪条件の中で、実写版もそれなりに頑張っていたと思う。無理を承知でいち早く実写化に取り組んだ気概と、アニメへとつなげた功績は高く評価したい。僕も、随分楽しませてもらった。それに今となっては、実写版に収められた半世紀前の東京の風景は、何より貴重な財産だ。

著者：千蒙豹一郎
作家・評論家。日本刑法学会、ベツ法学会会員。
著書に『法律社会の歩き方』（丸善）『スクリーンを横切った猫たち』（ワイス出版）の他、『東京新聞』、『猫生活』（緑書房）『ミステリマガジン』（早川書房）をはじめ連載多数。独特な題材と切り口で、草創期からの海外ドラマの研究にも力を入れている。



昭和30年代の 僕と日本の少年時代 備忘録 for iPhone

© Miriamword Co., Ltd.



あの日、未来は明るかった——。
慌ただしくもほっこりと、現代人の郷愁を誘う
“昭和30年代のマスカルチャー”

ケースー先生や力道山に憧れ、アトムや鉄人に熱中し、カラーテレビが、クーラーが、ハンバーガーショップが身近に押し寄せてきた夢いっぱい少年時代。一方で、周りを見回せば捨てられたガム、連続する鉄道大事故、暴走タクシー。牛の検体の馬肉100%コンビーフや怪しい溶けないアイスも売られ、食の安全はそっちのけ状態。“古き良き昭和”はかりではない、リアルな日本の高度成長期を描いた軽快なエッセー。

大田区大森を中心に、高度成長期の東京がいきいきと甦ります。




当書 DVD版は、月刊 FDI 編集部にて
本文：108ページ / 映像：2分23秒 2012年9月ミリアムワード(株)発行
価格：1,980円(税込)
 株式会社ユニワールド 東京都世田谷区松原 2-34-9
 TEL.03-5376-7233 FAX.03-5376-7246 info@uni-w.com